



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ニコラウス・クザーヌスにおける「非他」(non-aliud)と「他」(aliud)について : 「非他」は他者と異なりつつも、他者にほかならない : non-aliud neque est aliud, nec ab alio aliud
Author(s)	野沢, 建彦
Citation	基督教学, 21, 30-33
Issue Date	1986-07-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46447
Type	journal article
File Information	21_30-33.pdf



ニコラウス・クザーヌスの《non-aliud》
における「非他」(non-aliud)と「他」
(aliud)について

「非他」は他者と異なりつつも、他者にほかならない—
non-aliud neque est aliud, nec ab alio aliud

野 沢 建 彦

(1) ニコラウス・クザーヌスの哲学の主要なテーマは、無限なものとの有限なものとの同一性である。彼は『知ある無知』において、「無限なものとの有限なものに対する比は存在しない。」と述べている。比とは「より多い、より少ない」という比例関係のことで、学一般がこれによって成立し、理性 ratio がこれを司る。しかし理性の働きによる限り、「多角形の円に對する比」は限りなく縮まるが、両者の同一性はありえない。ではどうすれば比を超えた同一性が得られるか。この課題は一般に「反対の一致」によって説明されるのであるが、われわれはこ

の難問に、《non-aliud》を介して、「非他」は他者と異なりつつも、なぜ他者にほかならないのか、という根本的問を立てて立ち向ってみたい。

(2) われわれに特にすぐれた仕方では知識を得させるものは何であろうか。それは言表 oratio あるいは概念 ratio であるところの定義 definitio である。では定義とは何か。それは①自分自身と②あらゆるものを規定 define するものである。そしてまた、あらゆるものを規定する定義は、規定されたもの(規定された対象の本質)とは他な別なものでない、esse non aliud。AはAと他な別なものでない(AはAにはかならない)。この他な別なものでない non-aliud (非他) という言表が定義それ自体の定義である。学一般は「他なるもの」の探求に専念し、「他なるもの」の否定である「他な別なものでない」(非他)に出会うことを回避する。しかし精神は「非他」(この場合存在根拠 ratio essendi)に到達することを求める。クザーヌスはこの「非他」に注意深くまつわりつき、人間的に知られうるものを見出すことをわれわれの課題として提起する。

(3) 本論の中心テーマである「非他」とは何か。それは「①他なるものではなく、②他なるものとは別なものではない。」「神は他なるものではなく、他なるものとは

別なものではない。」具体的にいえば「神は天ではなく、天とは別なものではない。」（「非他」は他者と異なりつつも他者ではない。即ち、他者にほかならない）非他は①「他なるものではなく、②他なるものとは別なものではない」という命題の前段は、①非他は他でなく、他と矛盾対立し、両者は同一でないと解釈できる。この被造的世界において、他なるものはそれ自身と自己同一性の他とは異なり、対立することは明白である。他なるものが対立し合う世界は闇である。かく、光と闇、「非他」と他とは矛盾対立し、無限に隔たり両者間には比は存在しない。

しかし、後段の「他なるものとは別なものではない」は、「非他」と他の間に差異はなく、矛盾対立せず、「非他」は他にほかならない、と解釈できる。前段と後段の命題から、われわれは、「非他」と他者は異なりつつも別なものでない関係にある、という結論を得る。しかし、差異があり同時に同一であるということは矛盾する。しかし、このアポリアはわれわれに何を語るものであろうか。

(4) 「非他」は他を介して語られることも、表現されることも不可能である。「非他」は把握されるものより大

きく、いっそう先に存在する。」「非他」は肯定でも否定でもなく、措定と奪取の先に存在する。」「非他」は他の先に切り離されて存在する。」なおかつ、「非他」はあらゆるものの最も十全な根拠である。」「非他」は存在根拠である *ratio essendi*。以上のことから「非他」は、超越的存在根拠であることができる。

しかし、なおかつ、「非他」の、そこには何ものも存在せず、認識されない。」すべてのものは「非他」のうちに存在し、認識される。

「非他」は他の先にあり、他と異なり、決して他となくらない超越的存在根拠であり、同時に、「非他」の、そこには何ものも存在せず、認識されず、従ってあらゆる他を自らのうちに含む内在的存在根拠である。他は矛盾の先にある超越的存在根拠から存在を受けると同時に、「非他」の、そこには何ものも存在せず、一切を自らのうちに含む内在的存在根拠からも存在を受ける。それゆえ、「非他」は一切のもののから超越し、一切と異なり、しかも同時に、一切のうちに内在し、一切から他なるものでなく、一切にほかならない、関係 *omnia in omnibus* に入る。

(5) 更にこのことを敷衍すれば次の如くなる。あらゆる存在者は自分自身と自己同一でありながら、他に対し

ては他である。「非他」もさし当ってはこれと例外ではない。「非他」は自分自身と同一であるが、他でありえず、それから超越する。従って、「非他」は他をいくら重ねても、いかなる名称を用いても思惟不可能であり、理性にとっては無である。

しかし、この超越的非他は、同時に自分自身を規定することによってあらゆる他なものを表現する。「非他」が自分を見、規定することは万物を見、規定することと同じであり、万物は「非他」の現われといえる。なるほど、規定された他は消滅性、差異性、多性を有するゆえに、「非他」から峻厳に分離されるが、先に述べたとおり、「非他」を超えて、「非他」のそとに何ものも存在しえないとすれば、すべては「非他」のうちであり、「非他」を顕現し、「非他」にはかならない関係に入る。『非他』は他と対立することがない。

(6) さて以上によって、われわれが標題にかかげた『非他』は他者と異なりつつも、他者にほかならないが意味するところは一応承解されたと思われるが、この課題をシェーリングの言葉を借りれば次のようになる。非他は非他のままで存在し得たであろうが、しかし、そのように存在しないで、他なしに存在しない理由（非他

が他とほかならない関係に入った）は何であろうか。

それは「神の側からの偶然的恵与」(doc. igno)（超越的非他の内在）である。

(7) さて、最後に、神の最も近いシルシである「非他それ自身の認識」はどのようにして可能なのであろうか。クザーヌスはこれを、ディオニュシオス・アレオパギタのガイウス宛の書簡で次のように回答している。「もしひとが神を見て、かれが見たものを知解したとすれば、かれは神を見たのではなくて（他の）、或るものを見たのです。……かれは認識されることもなく存在することもなく超実体的な仕方で存在しています、そして精神を超えて認識されるのです。……完全な無知が認識されるもののいっさいを超えているかれの認識なのです。」神は人間の認識の限りを尽しても出会うことはできない。せいぜい出来るのは「他な或るもの」を見ることぐらいである。しかし、神は「他な或るもの」ではなく「非他」である。非他の認識は「知ある無知」による。

(8) 自然や人間の世界は「他」から成り、そこには対立と闇が支配し、理性の比的知が主張を繰返している。しかし、「もし、何かを神として措定した時、最早それは神から離れる」ゆえに、あらゆる措定や奪取を超える

謙虚な認識的浄化によって得られた「非他」の地平から世界を見るならば、世界は別の輝を呈するであらう。「他を非他のうちに、非他を他のうちに見る」世界が開け、非他と他との「驚歎すべき合一」が観想されるであらう。この事態をクザーヌスは「非他」という極めて単純な言葉によって定義したのである。「非他よりも簡潔で完全な真理は何も伝えられない。この真理は心眼を原理へと導いて、観想する人がそこで喜び不断に養われ成長する。」「非他」は、「見るものと見られるものとこれら両者から進み出る見ることは、それぞれ他なものでない。」ゆえに、われわれを三位一体の近みへと導くことを付言してこの小論を終える。